

若年性歯周炎患者の全身的背景

桑原 未代子, 杉浦 直樹, 久保 育子

要約：若年性歯周炎に対して免疫学的アプローチが行われているが、その異常についての追跡が行われていない。そこでこれらの異常に関して全身的検索を行い、半数において症状は全く存在しなかったが自己免疫疾患が疑われた。

見出し語：若年者、歯科疾患、歯周炎

まえがき：

歯周炎は中年以降加齢的に増加し、若年者に発症することは稀である。内山らの1983年の報告によると、本邦における若年性歯周炎の発症頻度は0.03%で、欧米の約1/10である。しかし、その評価基準が研究者間で異なっているため、実際の頻度は正確に把握できていない。歯周炎は一般的に進行が潜在的で自覚症状に乏しく、また学校検診においてはう蝕の検出が集中的に行われてきたため、若年者に多い歯肉炎すらも見逃されている場合があった。

若年性歯周炎は、1971年にBearによって次のように定義されている。

1. 歯周組織炎以外には特に異常を認めない若者に見られ、歯槽骨の急速な吸収が特徴的である。
2. 第1大臼歯と切歯の歯周組織に病変が限局している限局型と、多くの歯の歯周組織が罹患している広範型が存在する。
3. 限局型の場合、歯槽骨の垂直性吸収が左右対称性に観察される。
4. 罹患歯にみられる局所的な原因因子と組織破壊の程度の間に関連性が少ない。

この定義はすでに20年余の歳月が経過しているが、本症の特徴からみて背景としての全身的疾患について考慮する余地があると考えられる。そこで、本学附属病院に来院した若

年性歯周炎患者について、小児科および内科の協力により一般的検査を行い、全身的背景を調査した。

対象および検索：

対象とした症例は本学附属病院に来院した満20歳以下の歯周炎患者6名である。初診時の平均年齢は15.8歳で、総て女性であった。

局所の既往歴として、歯周炎が乳歯咬合期から発症していたのは最も若い9歳女児の1例で、他の5例は永久歯萌出後の発症と考えられた。

全身の既往歴として、14歳女子の1例が他院で甲状腺機能亢進症と診断され治療中であった。乳歯咬合期から発症していた例については、Papillon-Lefever症候群やLazy leukocyte症候群などの疾患は否定されており、特記すべき既往歴はなかった。他の4例についても、特記すべき既往歴がなかった。

これらの症例について血液及び尿検査を行い、異常所見があったものについてはさらに小児科および内科において検査が行われた。局所については、歯周疾患の一般的検査を行い、特に膿汁の細菌学的同定を行って原因菌を検索した。

結果：

1. 全身検査

検査の結果、異常が認められたものは3例であった(表)。すなわち、免疫グロブリン検査によりIgMの高値を示したものが3名で、これらは抗核抗体反応陽性を示した。また、1名がIgG高値を示した。特に乳歯咬合期から

表 若年性歯周炎患者の検査結果

| 症 例 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
|----------|-----------------|------------|----------------|------------|-----------------|----|
| 年 齢 | 9 | 19 | 19 | 20 | 14 | 14 |
| 歯周炎 | 限局 | 広範 | 限局 | 限局 | 限局 | 限局 |
| 尿検査 | 正常 | 正常 | 正常 | 正常 | 正常 | 正常 |
| 血液検査 | 正常 | 正常 | 正常 | 正常 | 正常 | 正常 |
| Ig mg/dl | IgM 425 | IgM 417 | IgG 1867 | IgM 495 | - | - |
| 抗核抗体 | + | + | - | + | - | - |
| 検出菌 | 2,3,4 | 1 | 1 | 1 | 5 | 1 |
| 抗生剤 | BAPC 著効 | MINO 無効 | BAPC 有効 | - | MINO 著効 | - |
| 症状改善 | 良好 | 不良 | 小康 | 小康 | 良好 | 良好 |
| 検出菌 | 1. B.gingivalis | | 2. Actinomyces | | 3. Gemella | |
| | | | 4. Veillonella | | 5. Streptococci | |

本症に罹患していた例は、甲状腺に臓器特異性をもつ抗サイログロブリン抗体、抗マイクロゾーム抗体が認められ、橋本病などの自己免疫疾患が疑われた。しかし、甲状腺シンチグラムでは甲状腺機能亢進の状態ではあったものの、肉眼的には甲状腺腫を認めず、T3、T4は正常、TSHは低下を示すなど、甲状腺の機能評価に一貫性がないため、小児科において定期的経過観察を行っている。他の2例も抗核抗体陽性であったが、現在内科において経過観察中である。他の1例は甲状腺機能亢進症と診断されていたが、本院で入院検査の結果、甲状腺機能低下が認められた。

他の2例においては、異常が認められなかった。

2. 細菌学的検索

若年性歯周炎の原因菌としてはグラム陰性桿菌が主体であり、B.gingivalis, Actinobacillus actinomycesemcomitens, Capnocytophagaなどが原因菌といわれているが、対象の4例でこれらが検出された。

3. 局所所見

局所所見では、広範型は1例のみで、5例は限局型であった。歯槽骨の吸収は、垂直型は4例、水平型が2例であった。

4. 治療

広範型の1例を除いて、一般的な口腔衛生指導または抗生物質の投与により良好な結果を得た。抗生物質の投与に際しては、盲嚢からの膿汁を用いて原因菌薬剤耐性の検査を行ったので、用いた薬剤は各症例毎に異なっている。

考 察：

若年性歯周炎は本邦において発症頻度が比較的低いが、近年多くの注目を浴びている。歯周炎はこれまで加齢現象にともなう疾病と考えられ、しかも口腔清掃が不十分であることが原因とされていた。しかし、若年性歯周炎については、最近では免疫学的アプローチがなされるようになってきたが、未だその病因は解明されておらず、治療方針についても確立された方法がない。

若年性歯周炎の起因菌の同定には、時間的、経済的な負担が大きく、特に時間的要因は臨床に全く利益をもたらしていない。そのため、顕微鏡下で菌の形状を観察する方法が用いられているが、菌の薬物耐性試験は必須事項と考えられる。

免疫学的な検査も多くの研究者によって行われているが、免疫グロブリンの上昇に対し

て現在までその原因の追求、もしくはこれに関連する諸検査は行われていない。対象のうち免疫グロブリン値の異常を示したのは4例で、IgMの高値が3例であった。その後の検索は小児科および内科において行われ、特別な既往歴や症状がみられなかったが、抗核抗体陽性で自己免疫疾患が疑われた。自己免疫疾患と若年性歯周炎の関連性については現在ほとんど検討されていないため、今後の課題であると考えられる。多くの症例報告で免疫グロブリンの検査が行われているにもかかわらず、特別な既往症がないこと、全身的症状が全くないことの理由によって、その後の検索が行われていない。また2例は甲状腺機能亢進症で、1例は有症状、他例は無症状であったが、甲状腺機能との関連も十分に検索する必要がある。

まとめ：

本学附属病院に来院した若年性歯周炎患者の全身的背景を述べた。若年性歯周炎に関しては、今後より精密な全身的検索が必要であり、単に歯科医師によってのみでなく、医師の協力によって問題の解決が推進するものと考えられる。

文 献：

- 1)岡田宏他：若年層にみられる歯周炎の臨床ならびに免疫学的検討、日本歯科評論 No. 514:125~134,1985.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:若年性歯周炎に対して免疫学的アプローチが行われているが、その異常についての追跡が行われていない。そこでこれらの異常に関して全身的検索を行い、半数において症状は全く存在しなかったが自己免疫疾患が疑われた。